

### 31 当学科における病院実習の意義と問題点（その2）

学院 義肢装具学科 中村喜彦、根岸和論、有菌裕樹

星野元訓、丸山貴之、高嶋孝倫

病院 リハビリテーション科 大熊雄祐

研究所 義肢装具技術研究部 飛松好子

#### 【はじめに】

当学科における義肢装具士の養成の中で、より実践的な臨床での教育を拡充するため平成 17 年度より「病院実習」を行い、その成果を昨年度の業績発表会にて報告した。この「病院実習」は、他の養成校にはない当学科の特長的なカリキュラムであり、学生にとって一般の授業で学ぶ義肢装具の知識や基本的な技術をより実践的なものへと深める絶好の場となっている。

しかし補装具提供という面からみれば、「処方」「製作」「装着訓練」という流れの中で、「処方」の部分に注目した内容となっており、患者に最適な補装具を提供するための製作工程や、装着訓練中の適合調整などを見学できない状況であった。

そこで、本年度より「製作」と「装着訓練」に注目し、病院実習の一部として「製作実習」を実施した。

#### 【製作実習の内容】

学生は、義肢装具技術研究部に併任している各教官と共に、実習内容としては「見学」が主となるが、可能な範囲で補装具製作の補助的な実習をさせた。教官は製作する補装具に対して患者の症状や生活環境を含めて説明し、断片的な実習ではなく、一連の製作工程を理解できるよう心がけた。

4 月から 10 月末までに、合計 12 人の患者に対し製作実習を行った。学生 1 人あたりの受け持ち患者数は平均 1.5 人、平均作業時間は 6.25 時間であった。各作業工程の累積内訳は「製作」が約 29 時間、「装着訓練」が約 4 時間であった。

学生からは、

- ・ 患者の症状に合わせた製作方法などが見学できて参考になった
- ・ 装着訓練中の適合調整まで見学でき、患者の状況が日々変化することがよくわかった
- ・ 義肢装具士が補装具を提供する工程をよく理解できた

などの感想があり、一連の製作工程として臨床現場を経験することで、より一層義肢装具に対する実践的な知識を深められたと思われる。尚、教官からは学生の技術・知識の程度を再確認でき、不足している部分は復習させた等の意見もあがった。

#### 【製作実習の問題点】

約 7 ヶ月間製作実習を行い、(i) 納期優先のため学生の時間割と必ずしも合わない、(ii) 品質を考慮すると学生に任せられる作業が限定される、などの問題点が挙げられた。特に (i) については解決が非常に困難であるが、他の問題点も含めて継続的に検討していく必要がある。